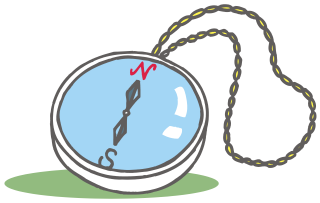
大阪市立柴島中学校　校長室だより　～主体的に学び続ける生徒のために～

羅　針　盤

第 21 号　　令和８年１１月９日（月）



◆ 引き受ける「寛容な心」

「引き受けることの喜び」とは、何なのでしょうか。それは、自己成長や、達成感、あるいは、他者からの信頼、そして、社会的なつながりの強化に深く根ざしたポジティブな感情ではないかと思います。まずは初めに、「引き受けることの喜び」の根幹を成している自己成長と達成感については、自ら新たな役割を引き受けることであり、これまでには知り得なかった知識を習得することができたり、視野を広げる機会となるということでもあり、困難な課題や挑戦を乗り越え、目標を達成したときに得られる満足感や充実感を得ることがとても大事なこととなり、そのことが自己肯定感を高めることへと繋がって、次なる挑戦に向けての原動力となってくれるはずです。次に、他者からの信頼や期待といったことについては、責任を持って最後までやり遂げようとする姿勢が仲間からの共感を得ることとなって、周囲の仲間から頼りにされて、期待に応えることで、自分の存在価値を実感することへと繋がっていくはずです。そして、社会とのつながりや社会貢献をすることができたという実感については、自分自身が引き受けた役割が認められることによって初めて社会貢献ができたという認識へと変わりゆくものであると思います。そのことは、社会の構成員としての実感や自身の人生における意味合いを感じ取れることが伴ってくるものです。仲間との連帯感や喜びを共有することは人として成長するための大きな財産となるはずです。人は、一人で生きているだけでは「ヒト」ですが、他者とのかかわりの中で、多くの人から喜ばれるように生きていくことで人と人との間で生きる「人間」となるとも言われます。人の間で生きるということは、「自分が必要とされている」ということです。「人間」の生きる目的は、ほしいものを得たり、何かを成し遂げることに限ったことではなく、「人として喜ばれる存在であること」であったり、「他者から『ありがとう』と言われる存在になること」ではないかと思います。「しあわせ」の語源は「為し合わせ」だそうです。お互いにしてあげることが、「幸せ」の本質であることを忘れてはいけません。そして何よりも、「寛容な心」を持ち合わせていることがとても大事なことです。心が広く、大きいことを寛大（かんだい）と言いますが、「寛容（かんよう）」とは、心が広くて、人の言動や失敗などを厳しく責めずに受け容れて許すことを言います。自分と違う意見を持っている相手の意見を広く受けとめて、ミスしたことや失敗したことを否定するのではなく、常に相手の「良いところ」を見つけだそうと考える力を持っているということです。「己（おのれ）を忘れて、他を利するは慈悲の極みなり」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。天台宗の開祖として有名な最澄（さいちょう）が残した言葉で、私たちはどうしても自分中心に考えてしまうことがあり、他人にはもっとこうして欲しいと望むことが多くなってしまいがちですが、そうではなくて、自分のことは後にしてでも、まずは他人に喜んでもらおうとする行いにこそ幸せがあるということ、つまり、私欲が先立っているような生活からは幸せは生まれてこないということを教え諭している言葉です。仲間と連帯し、協力し、互いに支え合うことに大きな意味があるということに気づき、「寛容な心」を持ちながら、「引き受けること」に大きなよろこびを感じ取れる人として、成長し続けてくれることを願っています。

